



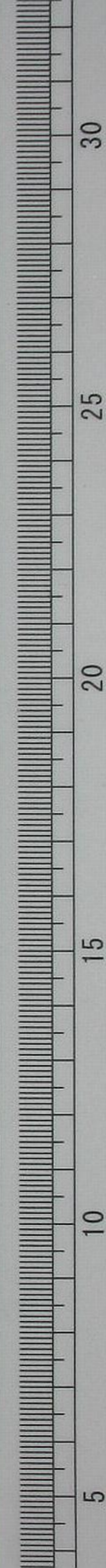
橘曙覧  
遺稿

志濃夫迺舍歌集

三四



土岐文庫  
文庫17  
W48  
3





指圖

文庫 17  
W48  
3

昭和六十年二月一日  
土岐善磨氏  
寄贈

010185194626

古四州



春明州 第三集

正月初いとの日古史記云とて

音りあけも先看る暮山六峯乃始の昔と讀いけり

名所立音

八雲の山出雲園の手間山ちよのてまれく立の霞か

音雪

白ゆきのふる木とまきもなすけり芽うはと見ゆ音乃青柳

志濃夫通舎歌集三ノ卷

茶のいしに詩金屋氏のまゝに

茵華白ふ少女の玉手もて摘むる春乃木芽や

八尋の佐楚君乃州戸おとろけしはけし

君とく知くそ足おを門ニせし駒迎へもけし

昔の青牛翁の許より消息は此より

杖のまてもれせりと下部の者告り

こ見けるもはさいりより

はあそ物せしと聞をとはいうより



かやまきけのういふと

大空の心くりふん思ふといひおこされ

目くもく老の坂路とよとるちれしと思ひ

昏駒

陽炎乃とゆる昏楚の荒あまはあ

春をけるる中ニ

邸雀軒端をゆく

海浦抄泉寺

所う死入相のうも浦風うらうちうささゆひく山寺  
更多き浦邊ういり申更食ぬ寺よやとり終二夜うん  
ふまくさ死里こけまつ流袖の臭ニ叩きげゆる山寺乃うを  
蒼山とち見知るぬ色乃うはさびハこころくくあくらそはりふ  
大空うたうう海うり山人心山路をしくの敷や志けくを

美人撲蝶圖

うたうき蝶はうらをて華園の花う少女乃汗をかひく乳  
蝶ういとせし手とゆきて御園生の花うさほり立山少女哉  
人妬くおもふ心を蒼うう蝶ううたうて臂ハ張うて  
敗荷  
莖折れて水うういふは枯蓮の葉うぬくて雨ふる  
影垂る星うせまりて薄黒き色うふりあお月夜山

渾樂畧

綱すく葦間の月を寝いゝ見る舟はもて去る風ふらハ吹け

楷痒席畧

寐まゝいゝて曾ゝく席の身あゝひニ小篠風も山岨の岩ゝ

雲莊畧

吾庵を外山乃雲の末ニ見て小雨あゝ田々牛ぬゝけいふ

雲閉る窓戸出て垣の田の暖るぬるに柔をとほか

升龍畧

乃ほゝゝも勢波以ゆりゝゝて摩る墨ふゝれ棄るゝみ雲

老檜畧

岩走る瀧もゝゝ根の下行て雲ゝ枝さけ檜木おゝろし

青松白窟

香青あゝ松乃末葉ゝ白妙の羽ゝらけけ鶴舞ゝゝ

白まゝも青葉ゝゝに打ゝゝゝゝゝゝ松上の鶴

萬竹圖

ありと有る竹ニ風と谷の奥水の響とゝゝ鳴くる

河隈乃巖ゝ根けゝ竹と竹ふひきゝる回る水以狭ゝ

澗めぐり流る水をく流くと靡きねくしてたたく竹う乳  
滑るるに露とひ苔路風ありて下陰くく記竹の奥のま

咏松

龍鱗苔さくさく白雲乃底う根けくく奥山のま

疎竹三禽畧

茂くぬ一とを竹の細き枝に乗りて親戸の雀兒と  
山うねと雀と二山今一山何鳥なきう竹くくり  
竹の霜うらとけ顔う頭三羽集めううるますめか

竹の霜とけく雀乃睡るかふ三羽一枝に羽成りて

臨水楳

蒼著て水又浸れり岸のうめ枝をくくりて更りりくる

山中

樵歌鳥乃さひりり水の音ぬきくく小竹雲くく

鹽場畧

夕食よはひくぬ燿を立させて空うたひをけける  
鹽竈  
雨漏てけくは倒きむ蜚り屋城火に焚くまでニふやす鹽竈

桂焼き玉ころけたる年ころけ藻鹽の煙ころけやふりける

背面美人圖

溪見州ちちむきく泥癖をはあやしくもちく花もあき  
美し泥黒髪とせにころけははして横もふり見せしむ  
額のひろきおろけくははこあはけ其曉もまらけり  
ふりける片頬をせしむと見くのせ人も後むくせけりけし

画石

筆援りて五日経るけし明くるは石の形見せしむ

煮泉畵

涌く清水岩根ふくく雲汲くて雀飛ふ山に松風を煮る  
おもしろくは落葉掃ひて木芽論るはうれ水は岩間を流る

歳寒三爻畵

霜千とひ故人のへり玉刀自髯ある翁のよひとる君

案風醉歸圖

敵おろけ風乃松葉鬘るけけ手ふり顔振り歸る醉人  
歸るころけ狂ひしめて酔る顔まののりけりすゆひけり行



蟻

大瀾を反似堤乃崩きとも引いと次とありぬ土は

雪竹音

薄白くなりしるる乃と雪の竹斜りあはるるをかくとう見る

雨竹圖

一と死濺き雨所せく重なりあひてあひく竹は

露竹音

白露乃とましく落て枝振ふ竹の志ゆくは函もてくは

風竹音

静ふる態を志け返るまゆはるる竹乃とくさひめくは

懸崖菊圖

季あはるる岩根ニよりて咲けり菊高く見てくは溪水

劍

福艸の三尺餘る穠霜枕邊ニおきし梅香は嗅く

牡丹

置あまの露乃白いも没見草蒼ねとりに立るふりま

北潟といふ里のそとに二つありて廣き入江のあり  
 行末田を墾しんしり近き空地の土を掘りと  
 此江填させんとすいり地ともあるは今年八年  
 凶くて産業を乏き民もふとはほとく飢もす  
 勢ひあふ思ふ歎くせまひも扶けもなむ  
 うと貧しきまゆりき限りをもよひせよ土  
 をこふこせせさせ銭くふへの命くはらばよ  
 より其こと見あゆふ司人をも南部廣茅さいり

瘦せ姿さうふ見らむに中又たり立てあろ君すくめ  
 其ナろの事れりけり浦へて捕りくるたろとて  
 鮒あまて人よ持せておくりく獲るちるる  
 て事志けくん中ふかくすてニ物しとまり心  
 の底ふうく汲とてうとつうおほいら  
 老う手すえとてそ祓めく藻臥東鮒見くらとら  
 ちれ中二つといふのハに能く動くやうふ

りけむハ物ニ水いれて放ちおきくらゝ目を経

てまはしく勢つまけり見るく

細いせむ恐しきすとして游へく水とほく住りし  
静ふるくろれ爰と見えろか 鱒ふる魚ニ我もまじりし  
くくはふる静ふありと 奥より善き夜中暁い処見てもけく

戯言

吾語をよろこひ涙こほりし鬼のふく声と夜は  
燈火乃もとに夜ふく來と我鬼我ひめ哥乃限りきくせむ

人臭き人ニ聞する語なりし鬼の夜ふけて來は放けしせむ  
凡人乃耳なりし天地のさろは妙と洩る夜

吾妻屋桎梏々むす子のをま姿より

我よりも高くなりし男ふりより親乃心

春水満四澤

道の邊に桑の立木も澤水の中よりなりし音乃雪解

示人

君臣品さをとりて動くる神國とりし

首夏

若菜はれちるはいに於こ乃山見ても何の木見ても麗しきこふ  
ちひらけりける日 翠木の中ふにけりける雲  
ほしき語りあけり又一人見へき山水とくとまろ  
かゝる又見へき山水一級つりつとせととあゝぬ此世此く

山本君の丹巖洞よりよはせて

ゆゑにける山見てとくる 欄干に肝つふさせて飛ぶ鳥のおと  
入奥より 里煤

風乃くめ斜よふまもちりり入る 藁の戸口牛吠る 函  
里より入るすふらふひくせいの梅よ來よけり石はり乃瓜  
繩よふりくく空ふまやりて

山家積年 聖二樂亭

杉菴を建てたもへは廿乃外み山の月日も短くりけり  
山ももひほりき昔はいつと迷ふ心もとえて幾とせ  
年あふく累りまいる軒の雲を渡よりとめ今ハおもひ

老の身乃ゆく末ふゆぬかけ作りとらぬひりくも山平在へぬ

竹久又

朝夕あましかり深くきけりゆく竹あけけりや重ぬむむ

伯君の別墅二樂亭

廣き水眞砂乃ゆき二見る庭のふもあ曳て山も連れる

早梅

そらせく香はゆき梅をせまき水てあぬもらぬ年も成けし

春成いろく心さうはうととらるる笠笠ぬて梅くるひい

田螢

夜もふほやうるあうと我引く水のく二あうとふ小田のま哉

池蓮

あゆまはるる華うさうと夕蛙をけ咲く池をとひくうふう

早梅

手うくは白ひ起しあかりうらて春といえとぬ梅は有とも

静見華

木の本うらり都くうらるる苔むらうさく見る日よもく物それき

閑對泉石

山とくわく雲吐く岩根ゆく水は翹ひくく來流鳥も如

三九殿のおもと人師子君うみて歌ふせなと

まり物ういまるたいりせてありりふも今日を

くきて草廬おとろく今くひ殿中のくほく志

うけて東うまりまりんものあすまふるよーりけ

まふあふとくうのうとくふるはなふるふる思ひ

まふはくく

逢ふうにむかひを告て人をくくひさせくく心なニふり

府中の青木夏彦とくひよりけななくあり

父公初のこといひいて袖うちあふるさくの種を

く此家やうけり朝くおき出たりけう

雙鶴公初まて合おのりかとニ湯に死てえへり

茶一山まめくけいて来まていとなくも

てたるけくふとありりけおとひいておの

とくともくちふうとく

函のうらニ我をよむ入を朝目よく木芽小やしく涙一君は  
 問よととこをま於風音もせぬ釜の上うく塵とまの  
 ね乃くすうあまゝひ所うゆりけとつゆ  
 もいぬる家と井ふさとりのよて妻して水  
 汲ははこるるこもうぬかうあまの廿年あま  
 のとをうへまけるあは涙今ハ女もやうく  
 老よとせハしつてうくをあゝぬ入まを貧  
 身中ふおもひこつりうあまのりうぬうて

井わくせうぬいとまをぬ水あまを出りさ  
 くまゝくくくくくくくくくくくくくくく  
 せしきいぬはるふりけむ 志ほふてあは  
 ふゆふはと汲む水もううた世ふりとぬ  
 袖のれとそらうあまひけりこのありう今ハ  
 ちぢぬとくく袖もちまうくをたぬへう思はる  
 とはあ乃新しき井の號を袖干井と致けて  
 濡しこ一妹う袖干け井乃水の涌出るばうう涙うけり

紅葉勝華

苔といへとはとくまげもほしむしうめてまふね種山のいろ

世の中のありさる思ひふけうれて

せめておちり涙もいずば盡さく空うちあかす泣きと

府中よとれりて貴志氏よやうとりけるう佐

木久波紫主角鹿子物とて此里はまきと

あときくにあのとびとあつるうの夜よくふと

どうぞとらうとに夜ふくるまで物語りしひり

あつこうとむとす昔

中におをつとをいよせてゆふは別とむしちも知とあま

短冊もあつて奇つれてとこはきて

いぬりのつくしぬしあ誠とよきくねハハハやけうむもの

志けしとこも

せり石まうふ音を又うて奇つれつけり今日も日くね

獨樂吟

とれしは叶のいほりの庭敷ひとりこころ寂りるとり



とれいとはとひつのかとより倒せゆす起すも知て寐一昔  
このいとは珍き書人より始め一ひつ程ひろけく昔  
とれいとは紙をひろけてと筆の思ひの外に能くかけ一昔  
と乃いハ百日ひひと成ぬ詩のふとたやろく出まぬ昔  
このいとは妻子むりましくうちほと頭あへて物をくく昔  
と乃いハ物取くせて善き價惜いけとれく人のくく昔  
と乃いハ空暖くにうち晴し暮れの日に出てありく昔  
このいハ朝おきて昨日まで無り一蒼の咲けふ見く昔

このいとは心弱うかみそふと思ひつげと煙草まよと記  
と乃いハ意よのれ山水のあふと志於うに見てありくとき  
とれいとは尋常なるぬ書と画とうちひろけり見やてゆく昔  
とれいハ常に見ふれぬ鳥の来て軒遠くぬ封鳴しとき  
このいハあき米櫃より米いて死今日ばよしといふと死  
とれいハ物識人より稀にありて古く今以語りありとき  
とれいハ門賣りありく買て煮る鑑の香を鼻に嗅く昔  
このいハおぼろに更烹て兒等皆ううましくといひて食ふ昔

一乃一ハクろ讀ゆく書の中ニ我といとく一人以て一昔  
 一の一は雪ふるをちり酒の糟ありて食て火よあくる昔  
 一乃一ハ書とて倦るをりしあも声知る人の門とく昔  
 一の一は世ニ解とくする書乃心をひとりけたり得し昔  
 一乃一ハ錢ふくぢりてこひをるに人の來りて錢くぢり昔  
 一乃一は炭さしそちおけ火の紅くなりきて湯の煮る昔  
 一乃一ハ心をおぬえとらと笑ひうたりて腹をよれと死  
 一の一は晝寐せし庭ぬりふりる雨をさめてくる昔

一乃一は晝寐目さする枕へよあくと湯の煮てある昔  
 一乃一ハ湯をかき埋火を中ニけり置て人とくれ昔  
 一乃一はとぬきすに人集り酒飲り物食へといふ昔  
 一乃一は客人えくる折しちも瓢一酒のありけり昔  
 一の一は家内五人五とり風の風とにひくてあつあつ昔  
 一乃一ハ機ありとく新しきおろも縫て妻々着し昔  
 一乃一は三人の兒もそ丸くと大きくおぼる姿くる昔  
 一の一は人と訪ひこけ事もなく心ばいして書と見る昔

多のしは明日物くるとりよ占成 咲くをり火のたきこる昔  
多のしはたのやをよひて門あけ物とて来つる使えい昔  
とれしは木芽論して大きれる 饅頭を一刻何とていとき  
とれしはつゆ好める 焼豆腐、うまく煮つく食せけはと記  
とのしは小豆の飯乃冷く茶漬を物よりてい昔  
たのしはいやふ人乃来り長くもをりてい昔  
たのしは田つゝ行しは等々未整とてい昔  
とれしは衾のりきし物よりいひ成る、ちり寝入ると記

多のしは墨すかたに筆の運びを思ひをる昔  
多のしは好き筆びえて先水よりてい昔  
とれしは庭より書ける 昏殊のたき乃さるてい昔  
とのしは物錢ふくちかよけてい昔  
とれしは神の御園の民とて神乃教をふくおとよとき  
とれしは戎夷ちり中ニ皇園忘れぬ人哉見れと記  
たのしは鈴屋大人の後子生もりの御諭をく思ふ昔  
とのしは敷あふ書を辛くてい昔

とれしは菴寺山里日びくぬしやと程といそしやとけり  
 とのしは菴山乃此をに人遇て我を見しりてあるし  
 と乃しはふと見てほしくおとふ物辛くえかりて手より  
 繩のより賤嶽よりほりて  
 血となり昔ねとはふまき色と見ふは妹の植也  
 旅  
 今朝見ればあうさとも霜ふりて妹風さす岨のかげ道  
 養老瀑布見よ物しと岩根を腰けけふと

見ゆくはふと人けんの世ふとあふと  
 るやうにおふと  
 ちりちり人うあぬ岩けし瀧よりおくよと  
 伊勢外宮より頂根突きをり  
 一日とくはては御食とも御めし思へは身毛いよ  
 内宮より  
 ねりし朝夕くは御めしは身と粉にすむくひえし  
 御ひるは朝夕くは御めしは身と粉にすむくひえし

山室山よのほりて鈴屋先生の御墳拜とて

宿しめて風もいそぬ華浅今も見たりまはるむやま守らの山

おくせても生さう我の同じ世よあは履をもとをまゝ翁や

みやぶよ乃ほりてありける山紫水明處とい

よえふれやニやう返りて

山よ透とほる水の流せよ見あく昔無き

山紫水明処に在ける程ふりけり大田垣蓮月

尼の急注うくを誤りたりける

そこひて

ゆく水のゆきてかへぬ志こさげはいひてはくゆる鴨乃川岸

早鶯

呉竹乃葉山より枝の羽音はらはさせぬくひは

風葉日新

あはれくし日に入るる春色はいかりけり梅や、那きハ

瘦馬

見ろめれく脊梁アゆる瘦馬の髦みく一殊うりそこ鳴く

逸馬圖

溢  
し  
し  
力  
は  
う  
う  
と  
び  
や  
き  
て  
蹄  
蹴  
し  
る  
つ  
ふ  
ま  
く  
は  
ふ

洗馬畠

馬  
あ  
し  
西  
乃  
廐  
の  
柳  
け  
落  
星  
み  
く  
そ  
く  
ち  
あ  
り  
て  
立  
た

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

同  
書  
州



其後御館よりまゝ乃ほへ川崎致高主を  
 御使として仰せとありけとと賤しき身の  
 せらふかゝると思ふもくく旨きらんすなり  
 かく聞えあけせばはうさくもさすしとけ  
 させまひ仰せのまゝもさすまひはるこく  
 かく聞えあけせばはうさくもさすしとけ  
 させまひ仰せのまゝもさすまひはるこく

すれ園田よせの庵うはく花をまひてははる  
 ーさもあははらまことし御詩あうりまひ  
 りけりゆかひうふる御心をせ乃かゝりゆふ言  
 ずい出へしあゝとさりそむあーくやんそ  
 ことまひまひ  
 御めくこれ露なあまこニ戴きてすろ色りまき  
 華  
 師木嶋の大倭こころをみりの蒼ハばー人ニらりてちくうハ



同日すいひかゝるへき品ひとあやきまの無きさく〜我  
うらゆけニ春乃真心さるる花の姿乃しとけなきか乳  
かひありと思はせぬは世の中よさく見く〜日数ありけり

鈴屋先生の敷寫の大齋心のい〜成り〜

そりゆくふは漢土も大倭も道乃大む〜

〜へう思ひま〜人をはと〜

山ちく羅のかみ園のあ〜大和心とあ〜

伊藤千邨主の三田忌

語〜人のある声志みふ山ふく〜聞〜

青松院君七十御賀〜寄松祝をよませ〜

〜奉りける

脚曳の〜山乃奥乃松羅千々せも〜君〜の緒

四月廿四日加賀國山中湯あ〜物〜大藏

屋仰衛〜ふんや〜仰道あ〜

〜家ほくりひろけ〜此〜

〜みひける〜新室の詩〜

せは

模けしふとく建し家ゆくり手うらうらわてはなれ見ふ  
人あまこ来入りたひて夜晝と千世よりの代にほまけむ家  
御道たひの国守よりゆめをけりたけ

御史のこの奇きまは

やうりて司のまは出る日ゆ地り手ゆめゆきある民  
同一とらうて明くは寐さめて廣き板敷了

詰しはひ出て空うち見やりか

いかもかく志いまりて乃ち在明の月乃如くは古にすまほし

小曾原西應寺やとりあひけるは春のまらむす

めなくれりて悲しきやんこふうおほゆを

うみこよそくきよといへまよあはる

垢つげる小櫛見も少女子う黒髪すかた忘れあはむ

高瀬川とつとらへ川せうやうは仰道よいさ

れは人々ともは行ける昔

床に鳴くおほろと橋を横り見て酔倒とら寐うらみさ

人々酔くもつるまゝに大き石も力以出して抱き  
もたけ川中へうち入てけりありけりを見る

醉人の水うらりり石つてういふに臂を張る哉

五月三日の朝出るといひもて仰道空く

うくなりぬ雨あへる思ひも明日より今日

あひく昔よりと心まはりて事をいふ

あひく昔よりと心まはりて事をいふ

あひく昔よりと心まはりて事をいふ

けふふりけとは

浮雲乃ちちまよはく心よりあぬ雨いすれやうれ

人よあともて此君車といふ

一日くは無るやと譽るぞと見あくる簷の旦暮

大の關昔雨

須臾とせき乃杉邨よ陰しなほ心ふくも時雨哉

雲雀

升りたりの事ゆくといふもあつて棊のひはり音はくす

鶴

紅藍乃頂とかくちしめて巖上よりけはあさけひたり

芳賀眞咲の江門へゆくは

太刀の緒をそらうとせし雪雲ぬとぞ旅路ニやりくはふし

宰相君の都ニ上りせめて歸りまゐるる高雄

山乃ふりとそちひさ折枝は紅葉の著るを

錫ハリくける昔

高雄山々とのとらぬ錦をばうりきぬといふゆ人々誇るは

菊

種の花くおみつゝける等は見てもいふ人乃作りふは我

山路も踏むあそや菊のそゆ人目も媚て今ははくゆふ

人の手はくまさくかして吾妹を岩のニ盡は山邊のまく

正月十五日 慶應三季 丁卯 ね乃々家にて詩の會始め

物しけるに 青牛翁來りてやんとおき御懐

紙より出しうけいへく

宰相君の今日お会ゆるうせまふあまり

かの世ニ行てそのありさほ見てまぬりほくろに語り  
 きくせよとのまは仰せしやうけよとせめさう  
 けし此君乃ふまは御心ふく物しるる御本  
 性なはな潔き御とのくろにのみおのりまは  
 入の手下さまのまはひ近く見よりんわうの事ふは  
 山部もふさめれん人こつとひくゆり記さまは物  
 る圓屋のさうかと御つねに思はる  
 せんくはびめて今日の会乃ばめをかり

ねさま奇よさしほり青牛を御ら  
 せそいけのうはをさうとらう物い  
 かんふうく御さうかふくこも多  
 うとてこさと畏まらぬを戯れとらう  
 人磨呂の御像のまは机す燈け御酒了れかく  
 設け題とてもてく奇もは神の御前  
 ちくり題手とてやとて頬杖をしきかりけり口とて死やめ  
 ぶとく九奇よいて顔を見てやとて晩食の折敷ふ



荒き波よけ 晝おしひささくを 水漬く屍 君やまゝと  
叶せし屍と思ひさきめけむ 君ゆゑ消む露の身のほそ  
寐させむと泣兒乃こゝろも 歌も父ハ千里と声を曇る  
取て来し夷々音を 肴うて脊子ニ飲せし待酒醸  
矛とりて君往しよし季三とせ 經れと櫛笥我あけ日はふし  
初年詣  
稻荷坂見あくる朱の大鳥屋ゆり動いて人乃ほり来る  
春田雨

驅人牛の背よひより 烈く雨の華はくそ 明日もかけよ 犁  
大笠人布川正興やよひはり 訪くひくすの 見  
せける 白山百首の中ふる 奇よとて  
ゆるまけむ 白山嶺おろし さいさくと 敵立ちよとて 君も来つむ  
うの あくぬ 日さの 桃季見し物すまて 今滋さう  
ひて 出ゆきける お乃とひより 家よ乃より めて  
くよふめの 雪くらも 季の 袖の けくも ちやまけける  
山口清香 別墅二足菴即景

川杖ふきてゆれあふ浪のせニ羽をまろそは小鳥羣と仍

ある時与めぬ

月廿乃ふりやほる心より本心うらみ人のはり

某氏の別業よりはとて行けり主人の知るぬ

人ふりけり河津君とてこの山水のけしき見

うて一さきとえさせよとけいふこそれけり

ふりけり其あくる日河津君許より

りまのふいふとけりけんさあちあちふりけり

とけしきやひととてとてとてとてとてとて

あとも

山里といへとうはたれことするく吾廬を出さるるし

松間鶯

曳し音の在所さくうて見る松乃けいといれくくる黄鳥

連峯霞

芳埜山高ふりきニふりかほり洩れて音根の薄音く見ゆ

あゝ岩作



利乃くむさほつ園正く後日嗣のゆゑ成志りくふむ  
神園乃神の成へを千とる秋の園はとこそ神の園人

閑夜冬月

霜のくは冬木のゆきをふす黒くくゆてふくる庭中の月

夜氷

月ゆきを去ほりの上うけけを沈えくひの夜ハの川音

兼邊雪

松成乃く志ほくせを蟹少女ゆきく小櫛をとる朝けのふ

伊歙舎先生の書すて多りし反古一ひの今の先生

よりけて持ゆふる二奇一ゆりてくどよと

芳賀真咲々こひけくゆりよてあふく

ぬけや此書看ふけとハ夜七夜も寐てありきと神の筆蹟

聚蟻

庭潦天昔をばくしてハと塵一ゆけありとちりけを

微ふる蟻もカ強合をれて我ニ千重片物をゆりゆ

楯矛を伏て仇す秋ゆとの濃く出くる土あふみ蟻

地上より墮て朽ちけむ菓乃瓢くろめて蟻乃むらう  
 羣らひニひとひ奔ると見らう中は長きくもゆくる蟻  
 とれけし穴ハうらけよりてゆ蟻ハ軍の塵うはくえ  
 縦横より羣ひく蟻のすくやくさ妙く軍乃塵を具へて  
 蟻と蟻うらけつきあひて何れ支ありけし奔る西へ東  
 雨の雫ひとゆらけ露乃音りあはしきりぬ石上我  
 赤心報因  
 貞六荒男の朝廷思ひの忠實心眼を血に染て焼刃見澄け

因のこが念ひ瘦つる腸以筆よりむとく吾世ふく  
 仇より向き曉くけせ古人ニかゝひてあうハ因ニ仕へ  
 正宗の太刀乃刃より心因乃くせすし記筆の鋒揮む  
 因以思ひ寐くもさる夜の霜の色月より因に見る劍うふ  
 因汚は奴あはたと太刀抜て仇もあはぬ壁より物いふ  
 松葉乃夜あはるも耳より記枝あはるも丑とばあはへと  
 ひとりちとく  
 因世より入とも吾は現世に在とひとく歌をうむ乃こ

歌よみて 游山外ふし 吾はく天にありと地ありと

真宗寺カ自君夫君ニ後とてのち小きい母作り

て獨かまこめく菴の名をおのどニほけて

合掌庵と志とまといひ

潔く壁さへ月なるあはれ

梯民也許しゆまけるよむすめの華とりて組とい

弾きくせけと

久しくこりいてありける

うさくき色とはま川山とめて水とほけけし耳か

久しくこりいてありける

おろくそやとらニする老人ハ世ニあはれもありと思はれなく

二月廿六日 慶應元年 寅 今日ハ

宰相君の去年伏屋に入らせまり日あるを

おとこ家ぬら掃ひま

御館のかさばろく拜しまりかとせそ物しける時

あふしこ思へは去年の今日なりき津生をけて君の来

御簾中君乃御母君の六十一の御賀のこゝ

いづれもつるへく仰せありけるよより讀てとてまら

少女さひかくて千えり百かへりくり返してせとし乃緒手卷

かま月はかり

宰相君の東御山よけかりせとせまひ御いり

いづれもつるへく仰せありけるよより讀てとてまら

りかくく戴きまらりて

種のをひあけとつる案乃がさりてまきまらるゝとろ手てけと

三九殿のおとと人との大安寺よまらりてまひ

ぬとてうれ山の松よけあまらとまらりけるせとら

あしとまらとひまらとけつてよ

殊ふくら西の山寺いふふり一岩うねとまららうまらとら

殊乃くまらとまらら家つとに君う山路のあまらと思ふ

埜邨恒見子多くとらとれと皆むまめのみ

よて有けるを今とひ生まらりけるうひ孫ふ

そめららららう男兒よてありけりとまらま

いひ

君の家より生る男兒の立ちる産に常勇なりけり

辻春生はけりていふ物なりけり

語も乃も聞けりけり都々見せしり目以りて

河埜通雄は刀佩き氏名よふはおぬやけ

よりいふさきけりいふ

許さばて劍より帶く民の長民をくはにふり利を

けりて世は氏の名をよふは許しはひき河埜氏の家

ね乃う中廬の中ニ潜るをりけり心のうちニ獨

娛しと思ふとの朝夕かの歌ありけりをりけ

りけりいふさきけりいふ詩のつもけりけるは青牛

公羽見てたし書つてくはよといえはけり

より書てまゐせけりとの有けりは翁

宰相君の御まへにとて出御せさせしり

を御意をやうれいふとのありけり此えせ詩

のよけりいふさきけりいふ畏くもいふ出まひては

曙覽見せよとぬまりの翁ふけさる

修之御詩見くとまることふりけふ

うけふ更なるそとてそ

雀等うさへびりあつ大鳥の声あせむと思ひけさや

ころ狭き雀鷓鴣のちへつり波ふに風吹て空に

ころとふい

人臭き世はおうろ我ころそく山問く山の

梯とくいぬり短山高山神乃いほり

人の目見えぬ高山短山神乃いほり  
體とり宅そるは天地と我の間一垣一重  
天地の間隔なきを志けく體のゆるり  
物皆を立り雲霧と思へは見る目嗅く鼻  
糸一重の蟬乃翼もは人の臭とぬ  
美豆山の青垣山乃神封菜お茂る奥ニ  
吾魂と神習ゆく斯吾魂いとく厳凝

海浦妙泉寺日徳濃師の了り

菜を手りくいとくやくま物よつこり出けり

自りわてまそくはしりける見ると色はほひ麗しく

味はこぼれぬ紫菜よ乃りの大王のやう

味はこぼれぬ紫菜よ乃りの大王のやう

味はこぼれぬ紫菜よ乃りの大王のやう

味はこぼれぬ紫菜よ乃りの大王のやう

味はこぼれぬ紫菜よ乃りの大王のやう

味はこぼれぬ紫菜よ乃りの大王のやう

いふや後の五百年すまめどハゆる妙あるなり

三丑乃こと知りしゆるてハ仏す説するのり

内田君のことより唐紙の扇かくらと

かりけり使のをの子ニ此よりハハハハハ

心もてまこんといひつくはけとハハハ

みりはく使がこせてハハハハハ中よりハハハ

つりつるふらちとなり大いなる乃世人

めきてはくハハハハハハハハハハハハハハハ

おこせしきけさほゆそくそをもてせてやり

いづけり雨のほろ日こころありける

乃とくふる雨のおとめを聞めて出ぬとほふの柴戸

失題

何れも吾國體のあいあり痛く重みし物すきさかり

ま乃あくりたふりけふる更なる後と到りてさあぬ多し

恐るゝ末再うけて國體と兎毫バかりも疵乃こさしと

更より彼ら善更もちふもあふるはうらやふか

其こさび取用ふとハ自こ心もりたニこころ恐きあり

目のまへ乃更りふあは禍乃遺るむ末の世を思ふなり

潔き、神国風けりさしとさろくくくく神国乃人

善士

尊るゝ天日嗣乃廣き道踏まて狭き道ゆくふ物部

真心といえはやは真こころも正しき道ニよつて盡さは

大綱と天日繼を先とつてもろくの目と編む国と知也

天皇乃身もとな知る真心を於くしそらる吾國道





